

# な か ま

発行  
佐倉市立中央公民館  
編集  
なかま編集委員会  
〒285-0025  
佐倉市鏑木町 198-3  
電話 (043) 485-1801

つかの間のキャンプ----- 板井 省司 八十八カ寺歩き遍路結願----- 吉田 稔  
昭和 20 年 8 月 15 日の思い出---- 中村 一郎 斜陽館—作家太宰治の生家を訪れて-- 齋藤 孝一

## 「そろばん」を見直そう

田 中 修 司

そろばんのことを「算盤」と書いて「そろばん」と読ませるのも面白い。

ここでは、敢えて平仮名で「そろばん」と言わせて頂く。先ずは、某銀行のテラーの方にそろばんについて尋ねてみたら、今では銀行員でさえ使っていない、とのことだ。

こんな忘れられかけた物でも、平成 23 年からの「新学習指導要領」で小学 3・4 年生の授業に戻ってきたようだ。ところで、今から 4 年程前に『武士の家計簿』という映画が上映された。

この映画は、御算用者（加賀藩の財政担当の部署「御算用場」に勤める会計専門の下級武士）が武器は刀ではなく、そろばんで「そろばん侍」と呼ばれ、藩の財政管理をしながら破産寸前の我が家の家計を立て直しをするという、家

族思いの武士の実話の映画化である。

この映画では随所に五つ珠の音が「パチッ、パチッ、パチパチ」と心地良く、今でも耳に残っている。

昔は「御破算でえ〜願いま〜してえは〜」と、先生の個性溢れる発声と歌でも唄うような独特の節回しの声が塾の外にまで聞こえてきたものだが、今ではそんな声も聞けず、また塾も見掛けない。

今のそろばん人口は、ブーム最盛期の 10 分の 1 とは言え、当分の小・中学生に変わり、最近では小さい時から計算に馴染ませる為に幼稚園児から習わせるとのことだ。

暗算でも、あの「御破算でえは〜」の声に変わりビデオで数字を点滅させ、目に訴える方法も取り入れられるなど大改革を迎えている。

計算は、手計算よりも機械の方が早いであろう。が、そろばんでも競技大会での指先の反復数は 1 秒間に 10 回以上はあるそうだ。ただ、機械計算の場合は目と指先だけが頼りとなるが、そろばんの場合は数字の桁と珠数を瞬時に決め、また「九九」も必須で脳の活性化には申し分ない。

さらには、暗算は耳や目に入った数字を腿の上でそろばんをイメージしながら珠を弾いていく、という技は脳と指先の運動効果は大きい。

そろばんは、4 千年前からあったらしいが、3 年前に白井市に「そろばん博物館」がオープンした。ここには、清朝時代の物や一つの桁に 10 個の珠が並ぶロシア製の物など珍品が揃い、一見の価値はありそうだ。

(編集委員)

## つかの間のキャンプ

ある夏の夜8時過ぎ、玄関のチャイムが鳴るので出ていくと近所のN氏が来ていた。「今、公園でテントを張って中で酒飲んでるんだけど飲みに来ない」と誘われたのだ。これからシャワーでもと思っていた矢先だったが行ってみた。

テントの中は電池式カンテラが明るく灯っていた。N氏とは町内の防犯パトロールと一緒にいる程度でこんな形で話すことも、飲むこともなかった。N氏は町内会の活動に積極的でこの公園の清掃なども先頭に立ってやり近所の評判もすこぶる良いのである。話しているるとすぐに彼の奥さんが焼き鳥とビールを持って来てくれたのでテントの中に入れて一緒に飲み始めるとすぐにN氏がいなくなつた。すると奥さんは「主人がこんなテントの中にお呼び立て

して」と謝る。私は、「人間、声をかけられているうちが華、私ごときに一緒に飲もうと言われて有難いことですよ。」「ご主人みたいな人が町内には必要なのです。他人のことに無関心、余計なことには口出ししない、これでは町内は殺伐としますよ。」などと散々誉めちぎっていたらN氏が戻ってきた。

N氏は私の妻を電話で呼び出してきたと云うではないか。妻が来ると改めて奥さんに「はじめまして、よろしく」の挨拶から始める間柄であった。妻が来てからの会話はさすがに女性同士だ。狭いテントの中で場がすっかりなごみ延々と話が続いた。近所迷惑にならないように小さい声と意識するが大きな笑い声が出てしまうのだった。私にとつては何時やったか記憶にもない「つかの間のキャンプ」であった。

(ユーカリが丘 板井省司)

## 八十八カ寺歩き遍路結願

私達夫婦は昨年5月10日、四国八十八カ寺歩き遍路を結願しました。

十数年来の念願でしたが、平成23年4月から2年2ヵ月計8回通つての結願で、地図と案内書だけで歩けるか不安一杯のスタートでした。徳島の一番札所へは雨降る厳しい第一歩でしたが、歩いてみると遍路マークが所々に貼つてあり、道路標識も大きく提示されていて、迷うこともなく進めました。

ただ自分の荷物は全て持ち歩かなければならず、山道では重さに苦しみ、時には投げ出したいた気持ちにもなりました。又、やつとの思いで山門に辿りついて、本堂まで数百段の階段を登らなければならぬお寺もあり、バスやマイカーで到着して、荷物を持たず参拝される人々に会うと羨ましく思うことも度々でし

た。一番厳しいと思つたのは十一番から十二番焼山寺へ行く山道でした。一日中歩いても一人会わず、人家が見える道路に出た時はほっとしたものです。

高知県内はお寺の間隔が長く室戸岬、足摺岬にあるお寺参拝には苦労しました。

瀬戸内海側に入ると少し楽になり、八十八番札所大窪寺参拝で結願しましたが、自分達の足で歩いて結願出来たことで自信が付き、折々の話題にもなり、人生の一節を越えたと思つています。

特別の信者でもありませんが、出合った人々、時々の景色など大きな収穫がありました。12月8日高野山奥の院参拝で巡拝は終了しました。

五月雨に打たれ

結願 大窪寺

(ユーカリが丘 吉田 稔)

昭和20年8月15日の  
想い出

私は当時、関東州大連市に住んでいて国民学校(小学校)6年生の夏休み中であつた。朝から頻繁に「正午に重大放送があります、聴き逃すことのないように」というアナウンスが流れていた。何事だろうと子供心にも関心があつた。そして正午、母とラジオの前に座つた。「天皇陛下御自ら放送です、起立してお聴きください」とのアナウンスにつづいて君が代が流れ、玉音放送が始まつた。天皇陛下のお声は初めてで、雑音が入り言葉も難しく理解出来なかつた。母は凜として正座して聴いていた。途中から手拭いを目に当てて泣いていた。放送が終り、「なんで泣いたの」と聞いてみた。母は、「日本は戦争に負けたみたい…早く内地に帰りたい」と小さな声で呟いた。

子供なりに気分一新したく

て外に出てみて驚いた。電柱・街路樹・各戸の国旗掲揚器具に一齐に「青天白日旗」が閃いていたからだ。我が家の玄関にも掲げられていて、癪に障り取り外そうとしたが、母からそのままにしておくように言われた。

街行く中国人(当時は支那人と呼んでいた)は晴々とした顔つきであつたが、日本人を見ると睨みつける眼差しであつた。昨日までは、微笑みや控えめな態度であつた人々の変わり身に驚くばかりであつた。日本は絶対に戦争に「勝つ」と信じていたので悔しかつた。3月に硫黄島が、6月には沖繩が占領されたが、夏休みまでは学校で、教頭の特別授業で、日本は戦争に必ず勝つ、九州にアメリカの兵隊が上陸したら、神風が吹いて撃退する…と教えられていたのである。

(西志津 中村 一郎)

斜陽館—作家太宰治の  
生家を訪れて—

会社生活から卒業し、第二の人生をスタートするにあたり、訪れておきたい場所があり、1年を経て実行した。それは、青森県の金木町にある作家太宰治の生家であつた。「斜陽館」を訪れることであつた。

昨年の6月30日の早朝、東京から東北新幹線に乗り、新青森をめざした。奥羽本線と津軽鉄道を乗り継いで、金木町に着いたのは午後2時頃であつた。駅前案内板で確認して、10分ほど歩いて斜陽館に着いた。

写真では、見たことはあつたが、その大きさに圧倒された。真つ赤な屋根の木造建築は階下十一室、二階八室、庭園などを合わせ六百八十坪の豪邸であり、国の重要文化財に指定されている。

もう一つの目当ては小説『斜陽』の題名の斜陽という

文字がある襖の実物を観るところであり、これは思いの外、小さく感じた。

私が初めて写真で見たのは「はしか」を患つたように太宰に夢中になつた中学から高校にかけての時期であつた。

再び、関心を持つようになったのは、19歳のとき、当時の銀座・松坂屋で開催された「没後二十年太宰治展」を見たときであつた。写真・手紙・原稿などの本物の出品を見て、感動したことを覚えている。

その後、会社生活が始まり、日常生活に埋没していったが、定年間近の59歳のとき、ふと新聞に「太宰治 三鷹からのメッセ—ジ—没後六〇年記念展」開催の広告があり、これを観に三鷹に出かけた。そのとき、退職後には、本物の「斜陽館」を観に出かけようと心に決めたのであつた。

(王子台 齋藤 孝一)

## 8月の黒板

# 『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

### お詫び

弊紙7月号に掲載の「シルバー川柳」につきましては、既に他社刊行誌（全国有料老人ホーム協会）に掲載されたものであることが判明いたしました。

ここに、関係各位に多大なるご迷惑をお掛け致しましたことを一同、深くお詫び申し上げます。

佐倉市立中央公民館

「なかま」編集委員会

問い合わせ先 佐倉市立中央公民館 TEL043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鏑木町198-3

URL [http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0\\_1.html](http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html)

## つくし道

次世代の乗り物として注目されている夢の超高速リニア中央新幹線はJR東海によると、東京・名古屋間の2027年の開業を目指して今年度着工の予定ですが、最高速度、時速500<sup>\*</sup>で走ります。

45年にはさらに大阪まで延長され、完成すると東京・大阪間は1時間ちよつとで結ばれます。但し、リニアにはレールが無いので鉄道ではあり

ません。

JRという鉄道会社が鉄道で無い乗り物を手掛けることになりす。また、リニアはコンクリートのガイドウェイのなかを浮上して走りますが、騒音などを考慮してルートは8割超はトンネルになります。完成したら是非一度、乗ってみたいと思いますが、問題は完成時期。「待てない世代」にとっては、残念ながら夢のリニアになってしまいます。

(金井 義彰)

## あとがき

昨年3月、新聞で見かけた中高年の「きょういく」と「きょうよう」についてこのコラムで紹介したら少なからぬ反響があった。

あれから一年半、いまでは誰もが知ってしまい、面白くも何ともなくなつた。ちょうど絆、じえじえ、今でしよう、といった言葉がそこら中に氾濫し、聞かされたうんざりさせられるのと同じである。流行語大賞を受けた言葉

の命は儂い。

そこで後世に残るべき中年のためのきょういく言葉の続きを考えてみた。「きょういくよくにつく」、今日も食事にありついた。「きょうだんにたつ」、今日は断じて酒を断つ。「きょうてんにあそぶ」、今日も天気だ遊びに行こう。「きょうべんをとる」、今日は健康診断便をとる。

話が落ちたところで、お後がよろしいようで。

(田村 孝則)